

# 別府<sup>たばこ</sup>萩屋ものがたり

入江 秀利

天保十二年（一八三九）丑十一月廿一日、府内藩の御隠居閑山公が江戸よりの帰途、家来の役人を伴って別府村の萩屋を一夜の宿とした。萩屋の当主荒金市三郎（二代目市郎兵衛）は、閑山公よりお土産として黒羽二重御紋付を、母ミキに八端ちりめん、儀八郎も金五百疋を頂戴した。酒造業を営む萩屋は、わざわざ上方より取寄せた銘酒「白梅」を、志挺に雁壺羽を献上してもてなした。

（諸用留）

前藩主閑山公（<sup>ちか</sup>近訓）の府内入りは、藩主近信が夭逝したので急養子に迎えた近説<sup>ちかよ</sup>を後見するためであった。

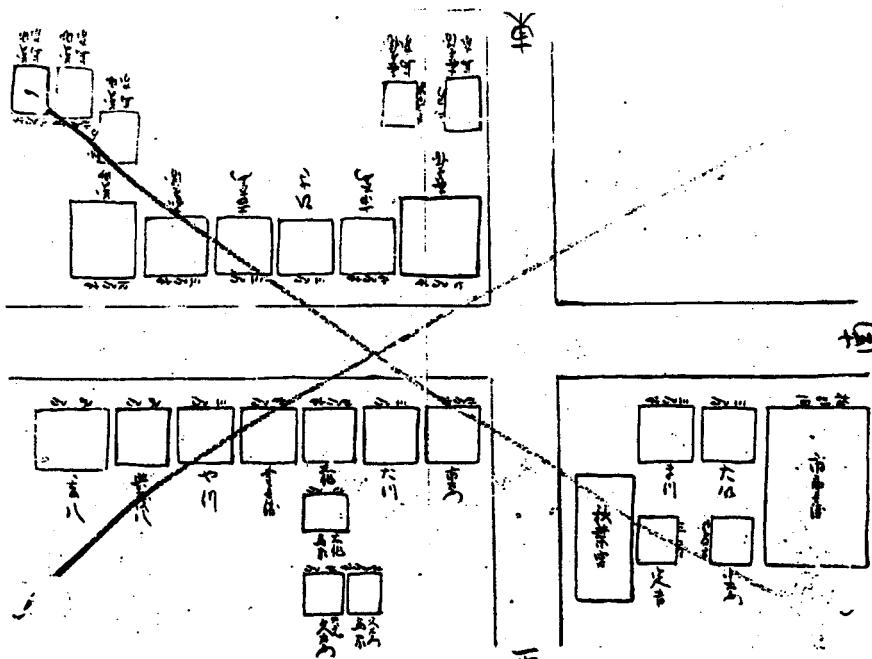
府内藩は、閑山公が藩主の時分から勝手元が苦しく、借銀に明け暮れていたが、帰藩途中に、府内と目と鼻の場所にある萩屋にあえて投宿したのは、おそらく下心あつての事であろう。それにしても、前藩主一行の宿を賄っ

た萩屋の身上は、並大抵のものではなかったであろう。萩屋は百姓で酒造業や生姜・七島筵販売を営むほかに、府内藩の御用達や土呂久銀山で賑わう延岡藩の蔵元もつとめていた。

どこにも、「〇〇様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」などという戯歌<sup>ざんか</sup>があるが、別府村に約二十町歩の田畑を持ち、浜脇から境川まで他人の土地を踏まざりける、といわれた別府村の萩屋もその類であった。

萩屋の屋敷は、秋葉神社の南の一角で、庭の泉水に伝馬船が浮かべてあつたほどの大邸宅で、のちに、旧国道を越えて東へと広がっていった。今のレンガホールの所にあつた土蔵作りの建物の一部が、松原の高野山に移築されて本堂として残っている。

不思議なことに、江戸期末期に別府村を席卷した萩屋



安政四年十二月出火・南の端が萩屋

の文書、記録がほとんど残っていない。ただ、荒金儀八郎が天保七年（一八三六）より萬延元年（一八六〇）までの出来事を備忘録として二六枚の半紙に綴った「諸用留」が唯一の文書といってもよい。したがって、萩屋の事跡は、他の古文書に散見する当家に関連する記事と、逸話や口碑伝承によって類推する外はない。

萩屋の出自もまた謎である。

萩屋の菩提寺である西法寺に娘が嫁いだ時に持参したといわれる「荒金家代々系図」がある。承応元年（一六二五）九月吉日に荒金五郎兵衛藤原則治が書き起こした系図を、天保十五年（一八四四）七月に儀八郎が書き写したものである。この系図は、

「十九代 荒金甚左衛門長規<sup>ながのり</sup>脇庄屋、元和五年七月十三日没」

で切れている。最後の長規から儀八郎までには二百三十二年間も空白がある。萩屋荒金家は田野口村より起こるといわれるが、田野口村に荒金氏が定住したのは、十六代

荒金五郎左衛門長斎の二男定澄の孫、荒金藤左衛門保忠の時からで、空白は更に広がる。(別府今昔)

市立図書館に福田紫城氏が書いた「煙草屋興亡史談」がある。これを要約すると、以下のようである。

宝永年間の末頃(一七〇八?)、日向高千穂長崎村の三治という煙草行商人が、その実直さを気に入られて、田野口村の旧家荒金惣右衛門の婿養子になり、別府村の南町に見世を開いて煙草売りを渡世とした。三治は市郎右衛門と名乗り、正徳四年に一子市郎兵衛をもうけた。市郎右衛門は「城島の煙草」を販路にのせて成功したといわれる。

市郎兵衛は市郎右衛門の家業を受け継いで身上を殖やした。やがて、寛延元年に長男通吉をもうけて安永二年に病没した。当時二五才になっていた通吉には祖父市郎右衛門が後見となった。

ところが、通吉は生来侠気に富み素行が荒らかったので、祖父の市郎右衛門は通吉を勘当して、隣家の旧家茶屋河村萬右衛門の三男を孫娘の婿養子にして、市郎兵衛を襲名させて秩屋を継がせた。

勘当になった通吉は日田郡代の青田検見役の下人となって働いていたが、四十才の時、天明の飢饉の時に百姓一揆を扇動した嫌疑をかけられて日田を追放された。別府に舞い戻った通吉は長州下関の期米相場をはじめた。当時、関米の相場は峠を結ぶ炬火の信号で、その夜のうちに豊後にまで知れたという。通吉は青田検見役で得た知識を元手にしてかなりの大金を稼いだ。

通吉は、さらに大坂に登って米穀問屋の手代に住み込み米相場を研究した上、堂島で手張りをはじめて三年後には二百萬両の巨利を得て別府村に帰って来たという。

秩屋の婿養子市郎兵衛は、通吉に家督の相続を勧めたが、通吉は仲町に新居を建てて分家を起こし、市郎兵衛通吉を名乗った。

通吉は、乙津村の庄屋池辺家の三男儀八郎通直を娘婿に迎えて、相変わらず堂島に出掛けて米相場を張っていたが、享和元年(一八〇二)の春、相場を打ち止めにして隠居した。通吉は、中町に屋敷を構えて以来、貧しい者に金を貸しても返済の催促をせず、むしろ、盆や年越しの夜半に銀子を投げ込んで廻って、陰徳を積んだと言

われる。通吉は文化元年に逝去した。儀八郎は文化二年に酒造業を創めた本家の市郎兵衛をたすけて家業の発展に努めた。萩屋の身上は義八郎の信望の上に築かれたともいわれる。

儀八郎は文政三年（一八二〇）に市三郎（市郎兵衛）をもうけたが、市三郎は本家の市郎兵衛の遺言により萩屋を相続した。それ以後は、分家の父儀八郎と力を合わせて本家の興隆をはかり萩屋は全盛期を迎えた。

分家の儀八郎は、豊前宇ノ島字中須賀の俳人半仏の弟宗十郎（丘鳥）を養子に迎え、市郎兵衛の娘（儀八郎の孫）を嫁にして、萩屋一族の結束を固めた。

市郎兵衛（市三郎）の子、猪六は造り酒屋を引き継ぎ明治に至るのである。

「煙草屋興亡史談」は、出典及び史料が示されていないので、史実とは断定しがたいが、恐らく逸話や伝承をもとにしたものではないかと思われる。萩屋の商いの元であった「城島煙草」についても、江戸期末から明治初期の産物をあげている「郡村誌」には城島での煙草栽培は記されていないし、通吉の米相場についての史料も傍証

もない。なにしろ、萩屋の暖簾を起こした元祖、日向の産三治の出自についてはまったく霧の中である。

南町に煙草見世を出した萩屋は、最初から商いが順調であったとは言えない。元文五年（一七四〇）に田野口村庄屋の荒金久左衛門が、横灘の荒金一統に呼び掛けて長松寺に阿弥陀堂を造営する寄金を募ったが、市郎右衛門三治はまだそれに応じることができなかった。また、天明九年三月の巡見使一行は、別府村庄屋の綿屋堀八良左衛門、南町の梅屋萬蔵、浜脇の備前屋市郎宅に休息したが、萩屋にはまだ巡見使を受け入れるだけの資力も格式も備わっていなかった。

萩屋一門の台頭を物語るものは、朝見八幡様の神幸道であった朝見川の北岸（幸神仏）に建つ石鳥居である。銘は寛政三年荒金市郎兵衛とある。市郎兵衛通吉が別府に帰って仲町に分家を建てた頃のものである。萩屋の隆盛は、河村家よりの援助もあったと思うが、分家の儀八郎と本家を相続した市三郎（本家二代目市郎兵衛）らに才覚があり、その努力によってもたらされたもので、享和年代以降であると思われる。まさに新興成金といって



幸神仏の鳥居（寛政三年 1792）

もよい。

萩屋の富は、鶴見山の松葉ランを一手に集めて江戸に運んで儲けたとか、大友時代にオランダより渡来した煙草の栽培権ないしは販売権を独占して得たなどと巷間伝えられるが、いずれも根拠がない。（別府今昔）

屋号の示すとおり初代が煙草を扱ったのであろうが、代が替ると、萩屋は広大な田地を手に入れ、米を原料とした酒造業が主業となった。朝見川のあちこちに仕掛けた萩屋の水車が昼夜を分けず精米していたそうである。儀八郎の「諸用留」、天保七申年の書留めに、

一、酒造米高 千石 此三分一 三百三十三石

（以下略）

と書いてある。これは、天保の飢饉のため米価が急騰したので、米を市場に流すために、酒造米を従来の三分一に減すようにという御触れに応えた書付けである。萩屋は例年じつに千石の米を酒にしていたのである。

南町の萩屋は「本家新宅合わせて城郭のような邸内に勘定方、倉土などの使用人の下屋敷が周囲をとりまくよ

うに外角を形成していた。本宅には、十畳以上の座敷が十四室、広書院三室、茶亭二つ、部屋の総数八十室をこえた。」この大邸宅は、横灘のどこよりも壮大であったのであろう。天保九年三月には、日田郡代寺西蔵太が旅の途中に宿泊したり、同年閏四月には、大巡見使の旗本平岩七之助主従三十七名が、昼休みに休憩した。この時一行の片桐鞆貞は西法寺、三枝平左衛門は、計や繁右衛門宅にそれぞれ休憩した。萩屋はすでに別府村の名家になっていたのである。先にあげた松平（大給）近訓が江戸よりの帰途来泊したのもこの当時のことである。

儀八郎は商人としての才覚のほかに、豊かな教養人であり風流を嗜み、二十才で八千房屋<sup>や</sup>鳥宗匠に師事して所思亭伍尺の号を許された。また、梅守、梅亭、香影、呉石などの俳号をもち、宗匠として近郷の俳人の面倒をよく見た。（別府今昔）

また、儀八郎は乙津村の碩学後藤碩田（今四郎）と昵懇で、碩田を通じて田能村竹田や帆足杏雨、毛利空桑など多くの文化人と知己を得た。天保二年（一八三一）田能村竹田が儀八郎を訪れて、萩屋の離座敷で南画「暗香



紙衣を着た荒金呉石（明治元年頃）

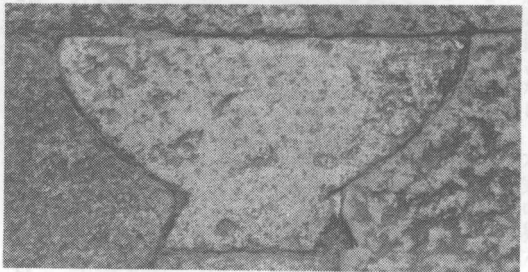
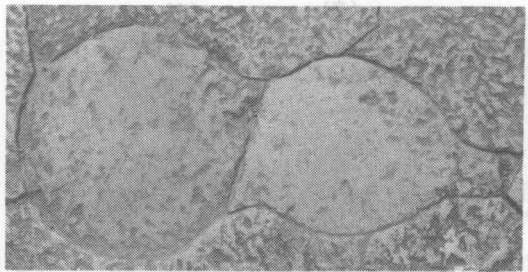
疎影図」（重要文化財）を描いたことは有名である。

一方、文久三年の春、長崎の外国人がもたらした電話機を使って、南町の本家と西法寺の間に電線を架けて通話の実験をしたが、沢山の見物人がつめかけたので、高松役所の役人が出張して中止させたといわれる。また、慶応元年二月、竹中傳吉という写真家が別府を訪れて、萩屋一族の写真を撮った。写真は高価なうえに、命を吸い取ると思っていた時である。行灯からいち早く石油ランプに切り替えたのも萩屋であった。

萬延三年二月、「西洋砲術製菓其外御教授方江戸御役人」を偽称する浪人福原麟之助に舎密術（化学）を習って火薬やリンを作った儀八郎の子宗十郎や本家の孫猪六が長崎奉行に検挙された事件もあった。進取の気性が禍した事件であった。（史談三号「ポスポール」参照）

朝見八幡宮は別府村の産土神で、氏子の萩屋はの石鳥居（寛政三）のほかに、境内には文政二年（一八一九）に市郎兵衛が寄進した石灯笼がある。しかし、朝見八幡宮には信仰以上の因縁があった。萩屋は本業であった造酒屋も手広くなり、酒の仕込みや飲料水として、吉備山井出の平の清水を南町まで引いた。清水は八幡様の杉を分けて貰って作った樋で引くことができた。嘉永三年に萩屋が参道の石畳みを寄進したのはこの礼のためであったといわれる。この時、商売のひょうたん徳利と盃形の切り石を敷きこんだところ、それが大評判になってかえって宣伝になったそうである。余った水は三ヶ所に切り石の水槽を作り近所の者に自由に汲ませた。渇水期でも豊かな水があったので萩屋の水と呼ばれ重宝がられた。

儀八郎や市郎兵衛は先代に倣って貧しい村人に、盆正



参道のひょうたん・さかずき

月に金品を与えたので、農繁期には大勢の者が加勢にきたたという。また、災害や飢饉のときには他村の者にまで救いの手を差し伸べた。

一、冬分困窮の小前へ別府村萩屋市郎兵衛殿より銀子下

され候 組内貰い候者は茂右衛門、太兵衛、次作、

長兵衛 此の四人 亦々久左衛門、孝次、八左衛門、

策左衛門、なども少々づつ施行これあり候

(家宝珍事記・中石垣村)

これはほんの一例で、儀八郎も市郎兵衛も度々高松役所より褒賞を受けている。

儀八郎の後見で萩屋本家は市郎兵衛、猪六と順調に業績をのばし、本家の「やまた」、分家の「かねた」「まると」「かくた」「やまじょう」と分家の屋号も増え、商いも手広くなっていった。扱う商品も本業の酒のほか七島筵や生姜の物産などにも手を広げ、ついには回漕業にまで手を延ばすことになった。

この頃の萩屋の蓄財について、一説には、萩屋の身上を担保に高野山から委託されて高野金の融資を行ない、その利殖の一部を受け取ったといわれる。高野山はその功績で山内に萩屋名義の杉・檜の造林を認めたが、大正十二年に萩屋が倒産したとき、その山林を売却してわずかな資産を残すことができた、という後日談がある。

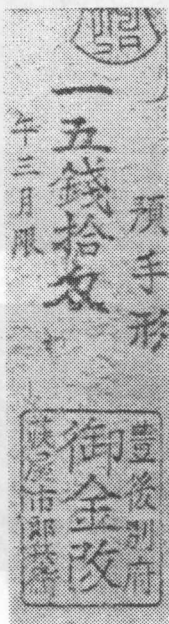
慶応三年(一八六七)、別府の村々が肥後藩預りとなり、市郎兵衛はそのすずめで幕府に多額の征長金(長州出兵の費用)を寄進して、その功により一代名字帯刀を

許され、晴れて浜脇村の庄屋に任命された。(豊後国御

預所一巻)ただ、荒金氏は小浦村庄屋脇谷氏と同様幕府の恩恵により庄屋になり、寄合所でも共に他の庄屋の上座に座していたが、御一新になって一時姿をくらましたという笑えない話もあるが、市郎兵衛は明治五年に大十五小区の副戸長となっている。(明治維新資料)

維新後、別府の村々は肥後預所から日田県知事、松方正義の支配を受けるようになった。この頃別府には肥

(表)



(表)



たばこ札(明治三年)



後・府内・岡・延岡藩などの藩札が通用していた。中でも延岡藩の千歳札は、もっとも信用のおける藩札であった。萩屋は、北浜（延岡倉）や浜脇（天領倉）にある米蔵の蔵元であった。萩屋は豊富な資産と延岡藩の豊かな経済力を背景にして銀札の発行を許可された。これを「たばこや札」といい盛んに流通した。

明治二年に儀八郎が没し、市郎兵衛に世帯を譲られた猪六は家業を継いだ。時代が移り政治や経済の急速な変化はいかんともしがたく、凋落の一步をたどったようにある。

伝えられるところによれば、萩屋の決定的なつまづきは、明治十年の西南戦争で、太政官札との両替を強要された西郷札が、西郷軍の敗戦で全てが紙屑同然になり莫大な損害を受けたことに始まる。また、時代を先取りにして別府大阪間の貨客運送会社をはじめたが、宣伝費や人件費が高み経営が思わしくなく、株主が猪六に株を押しつけて退社するなど不運がつづいた。明治二六年十月、暴風雨にあった山城丸が宇和島沖で沈没して、乗員・旅客の溺死や貨物の流失などで大損害を受けた。分家

の荒金氏も宗十郎が、県議会議員となり、本家の猪六と一時別府の政財界を牛耳っていたが、選挙に巨費を投じて次第に衰え、「井戸堀」にきしてしまった。

萩屋衰微の兆候は万延年間のはじめにあったと云う噂があった。

猪六の祝言の夜、披露宴の最中に金蔵の屋根の鬼瓦に長さ三間、胴回り一尺五寸もあろうと思われる白大蛇がわれて、驚いた宴席のものが大騒ぎした。巷間では瑞祥か不祥の噂が持ち上がった。市郎兵衛は極月の三十日に朝八幡宮で、厄払いのために前代未聞の大祭を催した。村人は「萩屋の千両祭」と評判したが、古老の話では不

吉な予感はないことである。

萩屋の末路は、ご他聞にもれず放蕩の末といわれているが、嫉妬に根ざす世情の噂であろうか。二百年近くも地方の経済を左右するほどの大家の史料が、これ程完璧に失われていることは謎という以外にはない。理由はともあれよほど丹念に処分したものと思われる。

萩屋の興亡は、庭園の内から一部始終を眺めていた内田病院前の大蘇鉄に聞くよりほかはないであろう。